

平成 28 年度 第 1 回 多摩六都科学館組合事業評価委員会 会議録（要旨）	
日 時	平成 28 年 5 月 10 日（火）午後 5 時から午後 6 時 30 分まで
開催場所	多摩六都科学館 2 階 201 会議室
次 第	1 開会のあいさつ 2 平成 27 年度 自己評価の報告について 3 その他
出席者	柴田委員長、小谷委員、坂本委員、杉浦委員、桧森委員
欠席者	なし
決定事項	○平成 27 年度事業評価報告書の外部評価の評定（段階評点）を決定した。 ○委員の総評（コメント）欄は、5 月末日までに事務局が各委員の意見を 集約したものを委員長と調整して完成させ、別途組合管理者に報告する。
資 料	（事前配布資料） 資料 1 多摩六都科学館 事業評価報告書（案） 平成 26 年度～平成 28 年度（3 カ年）の中期計画における 平成 27 年度の実績報告ならびに事業目標の達成度等に関する 評価報告 資料 2 平成 27 年度 多摩六都科学館及び多摩六都科学館駐車場指定管 理者 事業報告書 資料 3 平成 27 年度多摩六都科学館事業評価 市民モニターによる定 性評価 資料 4 多摩六都科学館利用者・駐車場利用台数集計表及び利用料金集 計表（歴年度対照表） 参考 1 多摩六都科学館事業評価活動の年間予定表
特記事項	組合の補佐として有限会社プランニング・ラボ・村井代表が出席した。
<p>凡例 発言者の略記（委：事業評価委員会委員、組：多摩六都科学館組合、指：指定管理者）</p> <p>1 開会のあいさつ 事務局長から、本日の審議内容、組合管理者及び組合議会への報告等を説明した。</p> <p>2 平成 27 年度 自己評価の報告について</p> <p>①（組）資料 1～資料 2 の説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成 27 年度事業の実績の確認と自己評価欄の主要事項を説明。 ・平成 27 年度から新たな取り組みとして、多摩六都科学館市民モニターによる定性評価、使命の検証を取り入れた。 <p>②資料 3 説明（組合の補足：村井氏）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市民モニターは、メーリングリストで情報を共有し、年間の主要事業に任意で参加してもらった。また、他の住民の意見等も自主的に集めて報告をいただいたケースもある。 ・意見交換会は、市民モニターを集めて、テーマに沿ったグループインタビューを行い、全員が意見を出しあって評価をした。 ・事前に指定管理者からスライドを使って主要事業の説明を受け、現場の考え方を理解したうえで審議した。 	

・特に、現場では定量的に計測が難しい成果について、利用者の立場から定性的に評価する点にポイントを置いている。

(委) 市民モニターで市民グループの方はどのような活動をしているか。

(組) 主婦・子育てをテーマに集まったり、地域社会とのつながりに意欲を持ったりした方々がミニコミ誌を制作する等の活動をしている。

(委) オプションの評価者が少ない理由は何か。

(組) 使命、活動理念、事業目標の達成度等、広範に科学館事業を見て評価する必要のある事項については、強制ではなく市民モニターの任意参加としたため。

(委) 子育て世代が中心となっているが、他の世代（シニア相等）の意見も取入れたい。

(組) 今後、モニターの人数を増やし、セクターも多様化できるよう検討する。

(委) 中学生・高校生の意見には大人の思いもよらないことがあり、中高生の考え方を聞くことは事業の企画運営にたいへん有効である。

(組) 調査と共にマーケティング活動の一環として検討していきたい。

③資料1説明（指定管理者）以下、特にポイントとなる事業について説明

1 中核事業

- ・誰もが利用しやすい科学館をめざし障がい者配慮型のプログラムの実施
- ・地域の地史、歴史をスタッフ・ボランティアが共に学ぶ体制

2 地域拠点事業—1

- ・ボランティア会の刷新と活動の拡充
- ・ジュニアボランティアの増加と運営体制の課題（つくる部の活動等紹介）

3 地域拠点事業—2

- ・圏域の遺跡と地形の関係性を明らかにする展示の開発
- ・地域の研究所、企業との連携を強力で推進——西武鉄道との協働で鉄道展を実施し、保安、ダイヤ組、工場等現場の多大な協力。西武鉄道社長から感謝状を授与。

4 マーケティング

- ・マーケティング担当と研究交流スタッフの緊密な連携体制

5 組織体制

- ・スタッフの目標カードに地域づくりの視点を盛り込み、チームリーダーが詳細に評価
- ・企画展は企画から運営まで内製を基本とし、企画スタッフが利用者とのコミュニケーションまで担い意欲の向上や発見につながる

総評

- ・文化・アート系のプログラムにも幅広く取組み、シニアや中高校生の取り込みを図る
- ・現在、多数のボランティアが東京の自然史を学び、地域の地史・新田開発の歴史等の自主的な探訪が始まっている

(委) 昨年度より利用者が3万人増えたが、利用者層の構成、特性で変化はあるか。

(指) 全体では大きな変動はなく、ファミリー層が約80%で主流。シニアキャンペーンで50歳代以上増えているが、中学・高校生は7%ほどで伸びておらず課題となる。

(委) シニアの増加の実態はどうか。

(指) 平成24年度からシニアが5倍増えた。また、シニアを含め展示利用が増えており、

ラボの体験者7万人以上と、入館者の3人に1人がラボのプログラムを体験している。
(指) 夏の企画展(感覚の迷宮)は、青森県立三沢航空記念館から引き合いがあり実施中。
その後もいくつかオファーがある。単にトリックの面白さを追求しただけでなく、脳科学による検証が独創的な企画となり、開発に取り組んだスタッフの励みにもなっている。
(委) 美術館の場合だとコンテンツ(美術展)による収入がある。収入の一つの方策として取り組んではどうか。

◎委員会の評定

(科学館職員・指定管理者スタッフが退席し、委員の間で自由討議を行った。これにより外部評価に係る段階評定を決定し、併せて出された総評に関する意見は、改めて5月末までに集約する)

3 その他

(特になし)